

書評

外科医から介護医へ
悔いなき医師人生を全う中!

『歌う外科医、介護と出逢う』
阿曾沼克弘著



齋藤信雄

洛和会東寺南病院名誉院長

最近、友人、知人の著作を目にする機会が増えた。多くは人生最終段階に至って、その生きた証を残さんための回顧録が多い。動物はgeneを残すために生存し、人はmemeを残すことに意義を見出す、そのような目的と思われる作品です。人は血縁・地縁・共通言語で生きると云う、これに合致する人の著作はいや増して面白。最近、単なる回顧録ではなく、これからの世の在り様を提言する二つの著作に出会った。その一つは同級生の外科医・遊見公雄君が幻冬舎より出した「令和の改新」という大それたタイトルの本です。地方限定でごまめの歯ぎしりをしている私です。彼は全国区で警世の論を展開し、国政を正すことを意図しているのです。予てからの主張が一貫してぶれないのに感心する。ユニークな発想に共感することが多くて一気に読めました。既読の方も多いと思います。

もう一つは、ここに取り上げた京都大学学術出版会から出された『歌う外科医、介護と出逢う』です。軽妙な題名ですが立派な学術書なのです。芝蘭会報で紹介したいと思ったのは次のような理由からです。今や普通の手術になった生体肝移植で世界をリードした京都大学外科チームの創成期の一ページが歴史として生々しく語られ

植「京大チームの挑戦」でも登場する。本書では当時の内輪の話が生々しく語られ、併せて読むと一層の興味がわきます。

*

最近関西に戻ってきたので、京都大学外科学交流センターの集まりで顔を見るようになった。熊本大学で肝移植外科に専念していた人物に老健の施設長をやっていますと言われて、そうかそんな年になったのかと思っていた。65歳、70歳で停年退職した勤務医が老健の施設長と言うのは医者のキャリアでよくあるコースの一つです。しかしながら、この本で明らかにするように、実は全くそうではない。老健に職を得たのは、積極的な動機の実現であることが分かり、感激したのです。

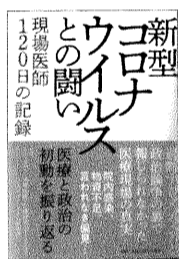
医師の一生を考える年になった。特に外科医の一生を考えてみると、先ず修行の10年、1本立ちの20年で55歳になり、執刀医としてのキャリアはせいぜい残る5年である。重なりながら次を育てる役回りになる。手術した患者さんのフォローが中心の医師人生になる。自分の手のひらに乗った命を預かる緊張した毎日が外科医の仕事です。生体肝移植のような絶対取り落としはならない手術、高難度の手術はがん治療とはまた違った意味で緊張を強いられる。上医は国を治し、中医は人を治し、下医は病を治す。医師のランク付けのようですが、外科医にとっては下医こそがベストの在り様。年とともに仕方なく中医上医へと変身せざるを得ないのが実態ではないでしょうか。阿曾沼君は最高級の下医人生から見事に意思をもって中医へ転身した見本のような生き様を見せてくれた。

の死に付き合ってきた外科医が緩和ケア医に転身する例は多い。外科医を止めて緩和ケアへの転身も考えたが実現する勇気がなかった。終末期の患者さんを結局は誰かにお願いする立場にいる。終末期医療の在り様を含めて、医療の安全文化の醸成に心を寄せている。目標は医師・患者間の信頼の構築です。勇気をもって転身した阿曾沼君が高齢者医療、介護の実践の中で深い考察をまとめて見せてくれる。益々今後の実践の中で新機軸を打ち出してくれるのではないかと期待する。自然な終活実践の大きな手段の一つが医師の丁寧なインフォームド・コンセントの下で行われるアドバンス・ケア・プランニング(ACP)というわけだ。著作の中にもその重要性を取り上げています。厚労省はACPを普及させるために平成30年に愛称募集を行った。ACP先進病院の聖隷浜松病院の看護師さんの提案した「人生会議」と決まった。この名称をタサイと断じてくれたので、少し留飲を下げた。実は私も愛称募集に応募したのです。「終わり良ければすべてよし作戦」。

愛称、形式はとにかく、ACPは終末期における医療安全文化の要の習慣となる必要があるです。尊厳死を願う高齢者が最後の時点で望みもしない修羅場に陥る原因は家族か、医師のどちらかが作るのです。救急車を呼んでしまえばそうなります。本書の最後に述べています。形式的な人生会議など多分実現不可能でしょう。本人が自分の人生の最期を委ねられるか、かかりつけ医を持ち、家族に平穩死宣言を託す。かかりつけ医が家族と意思疎通を持つ。まさにこれでのよいのだと思います。医師人生のどの段階で本書を読み、鼓舞される一書であることは間違いがない。

力を併せて
コロナを切り抜けよう
第二波の経験糧に

『新型コロナウィルスとの闘い』
現場医師1200日の記録
地域医療・介護研究会JAPAN、ヘルスケア・システム研究所共著



邊見公雄

全国公私病院連盟会長
赤穂市民病院名誉院長

実は今月も3冊、10月8日に開催予定であった「国民の健康会議」の講師の皆様方の著書を紹介する予定で、原稿も校了していた。しかし8月20日に健康会議の中止が決まり、コロナ第二波の真只中のお盆に上梓されたこの本を紹介させていた。この国の人は忘れっぽい。飽きっぽい国民性である。沖繩戦や先の負け戦も記憶の彼方に押しやり、ダイヤモンドプリンセス号の事件も去年の出来事のように思っている方も私の周辺には大勢いる。「これではいけない」という私の盟友であるHCS(ヘルスケア・システム研究所)中野一夫社長の強い思い、そして来るべきX波や必ず起きる新興・再興感染症への備えとして、最前線の方達の緒戦1200日間の従軍記である。私は退役軍人の立場で後方支援しか出来なかったが、医療現場の医師や薬剤師、検査技師、指揮を執った管理者や院長、後方支援の物流担当者、持続化給付金等を担った会計士、クラスター発生が多かった精神病院や介護施設の代表、熱帯医学で感染症専門医などからの報告。更には学生の教育やアルバイトが無くなり退学者の歯止め

と思われていた所が大活躍。今回も地域医療構想で改善指定された424病院のうち80近い病院がコロナ患者を受け入れている。霞が関でデータだけを見て現場を知らない(東京者)には到底判らないのである。この本の出版にあたり、超御多忙にもかかわらずアンケート調査で御尽力いただいた回答病院の方々、HCSやLMCのスタッフ、何と言っても編集や寄稿者との交渉を一手に担っていただいたHCS上席アドバイザーの金子晃三氏、そして執筆いただいた皆様全員のご苦勞に感謝しながら本書を紹介させていた。コロナで亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、御家族、患者の皆様方が一日も早く癒されることを願って稿を閉じる。尚、続編を予定し、今回多忙等で入らなかった看護師や感染症患者さんの分を入れる予定です。乞う御期待。(5月出版予定)

芝蘭会費納入は自動振替で

平成17年度より芝蘭会費の納入方法として、「銀行口座等からの自動引き落とし」を採用させていただいております。会費納入のお手間が大幅に省かれ、また、会費の二重払いの防止にもつながります。ぜひ、ご利用いただきたくお願い申し上げます。手続きについては芝蘭会事務局までお問い合わせください。手続き等については、
芝蘭会事務局 TEL 075-751-2713 FAX 075-752-4015

ご注意

最近、芝蘭会員の方々へ芝蘭会員または京大医学部事務職員の名前をかたって、個人情報(住所、電話番号等)を聞き出そうとする不審な問い合わせの電話があるということを会員の方からご連絡をいただいております。芝蘭会とは全く関係がございませんので、くれぐれもご注意ください。なお、芝蘭会では会員の方から住所変更等のご連絡がない限り、事務局からはお問い合わせはいたしておりません。ご不審なことがありましたら、芝蘭会事務局までご連絡ください。

